

「しんどさ」の中でつながる、
「しんどさ」を越えてつながる
：2007年見沼・風の学校活動報告

見沼・風の学校事務局長
猪瀬 浩平

1、はじめに

：端境期を迎えて

今年の3月、風の学校の初期メンバーが大挙して大学を卒業した。サバイバルキャンプ実行委員長経験者が3名のほか、ぺんぎん村との提携活動「のらんど」の中心メンバーが、学生から社会人になった。かくいう自分も4月から大学教員となり、2006年時は週5日ペースで行っていた農園に、週1回しかいけなくなってしまった。

一方で、昨年末くらいから、社会人になって仕事が落ち着いてきたスタッフが、月2、3回のペースで農園の作業に参加すると共に、会計システムの構築など、仕事で得た知識を活かして活躍する場面も見られるようになった。

これまで風の学校に関わってきたスタッフ個々の力を高めていくこと、集めていくこと、そして新しく仲間を募っていくこと、その中で3月に「穴」をどうやって埋めるのかが、今年の課題として突きつけられた。

一年が終わる中で感じるのは、そういう課題は問題の一部分に過ぎないということだ。単にスタッフの人数の少なくなったことが問題なのではなく、今、直面する問題を自分の立居地で受け止め、そこで汗をかく人間がどれだけいるのかが重要である。

風の学校を同窓会的なサークルにはしていない、と強く思う。

2、畑作業

今年もジャガイモ、サトイモを大きく作付けした。いずれも、なかなか良いものが収穫できた。夏野菜については、農園代表のアドバイスにより、ソルゴーを圃場の周囲に植えた結果、アブラムシの害を少なくすることもできた。しかし、ナス、トマトなどあまり勢いの良いものではなかった。小さい区画で回しているため、連作障害が起きていることや、地力が低下していることが考えられる。来年は作付けの場所を第3農園の管理地へ移動すること、他の団体を見習い、堆肥を大量に投入することによって改善を図りたい。一方で、野菜のスタッフ間の分配や貯蔵がうまくいかず、せっかく収穫した野菜を無駄

にってしまうことも多々あった。

風の学校の野菜作りの基本は、「自給」である。共に汗をかき、共に味わう。来年は、保存をしっかりすること、料理や加工の仕方を工夫し、共有すること、そして農園になかなか来られない人も含めた分配の仕組みづくりに取り組みたい。同じ土から生まれた野菜を食べることが、風の学校の共同性のベースにあると思う。

3、平日の体制

今まで猪瀬が週2日半、矢澤が半日入っていた、ぺんぎん村のメンバーの農作業へのサポートには、今年から埼玉大学の大学院に入った植松潤と立教大学の鈴木拓也がそれぞれ2日と1日入ることになった。平日参加スタッフが総取替えになったため、農作業の技術面や障害者メンバーとの信頼関係の構築に問題が起こることも危惧されたが、これは平日の作業に継続してかかわり、また農作業の面でも指導的立場にあるシニアのボランティアの方々の存在によって、この点は大過なく引継ぎがなされた。新たに参加した植松の発案により、大学での野菜販売など新しい動きも生まれた。

一方で、昨年本格的に始まったハーブの生産、加工、販売を軸とする共同事業「のらんど」の活動については、中心メンバーだった藤原が社会人となり、昨年「のらんど」にかかわっていなかった植松がほぼ一人でまわす体制になったため、作業ノウハウの引継ぎが不十分で、活動を本格的に展開することができなかった。

2008年3月で鈴木が大学を卒業する。植松も大学院の研究が本格化する中で今ほど農園に来られなくなることが予想される。「3月の先」の平日活動スタッフの確保と言う課題は、来年にも継続して起こることになる。これは技術の伝達の問題ばかりではなく、障害者メンバーとのコミュニケーションの継続性を考える上でも、望ましい事態ではない。また農園の作業ばかりではなく、加工・販売面で中心的に動くため、平日に活動する少数の人間の負担が過剰になるという問題も起きている。

障害者メンバーとの共同作業を、学生ボランティアやシニアボランティアに依存し、つなぎつなぎの綱渡りをする現状を改め、農園で稼ぎとしての仕事の場とするスタッフを如何に確保するのが、ぺんぎん村、風の学校、そして福祉農園全体にとって、重要な課題になっていると言える。

4、 農的若衆宿、サバイバルキャンプ

：「しんどさ」の先の共同性、創造性へ

農的若衆宿は、農園を農業や環境の問題に関心を持つ若者たちの交流拠点とすることを目指して2004年に始まった。今年4月と10月の2回開催した。そこでの新たな出会いもあったが、そこから農園の活動に日常的に関わる存在はまだ出てきていない。開始当時の若衆宿は、農業者大学の学生が百姓先生として、存在まるごと指導的立場に立つ事で、農業を体感するイベントとしての意味を生み出していた。彼らの最後の一人が卒業した今、これまでどおりの若衆宿を維持することは困難であり、そのあり方の再考が迫られている。

一方、今年のサバイバルキャンプは、2007年の8月12日～18日の7日間にわたって行われた。埼玉大学、立教大学、東京農業大学などの学生に加えて、見沼・風の学校の社会人スタッフや、関係団体からの参加もあり、30人以上の人々が農園で汗をかきながら作業をし、同じ釜の飯を食べて語り合う一週間になった。

① 実践の中で生まれたもの

- ・ 畑仕事が生み出す絆：障害者である一ないや、年齢の違いを超えて

実際に農園での作業を中心に行うということから、日数をかけて作業を集中して行うことでの参加者個々の技術、感覚を高めることが出来た。また、畑の状態は飛躍的に改善され、道具小屋の建設など人と時間をかけなければ出来ない作業も行うことが出来た。また、道具小屋作業や畑の作業出についても、週末を中心に活動を行う見沼・風の学校のスタッフだけでなく、平日の障害者団体でボランティアとして日々農園を支えてくださっているスタッフの方々と作業を一緒にすることができたこと、少人数だったので参加者同士の交流が深まったことなど、関係性の面で大きな意味があった。

これらは、今年のサバイバルキャンプの狙いであり、毎年やってきた農園の外に出て、他団体や農家の人と交流するというのを、敢えてしなかったことで得られた成果でもあった。

・ 技術への視点

また、講習会などを通して農園での実際的な作業スキル、また、可能性などを探ることが出来た。

メンテナンス講習会では日常的に使う機械を多く

の人間が使用後管理まで含めて、メンテナンスの技術を得ることを目的としており、それによって作業の効率を上げ、無駄な浪費や事故を防ぐことにつながる大変意義のある講習会であった。また、染物講座では農園にある染め材として、多くの素材を幅広く利用可能であることが認識できることで、野菜づくりだけではなく農園の可能性を見出せることになった。

・ 福祉農園という場が持つ社会的課題の共有

勉強会では、見沼・風の学校校長である小松光一氏らに来園いただき、話を伺った。福祉農園で農作業をすることは、単に野菜を作るという営みにとどまらず、農的営みの中で形成されてきた見沼の環境保全や、「障害者」をはじめとするマイノリティとの共生、といった社会的課題に取り組むことでもある。見沼・風の学校の活動に継続してかかわっているスタッフを見たときに、そういった課題を共有するか、否かが重要な分かれ目であるように感じる。新しく参加する人たちや、見学者に、その部分を如何に伝えていくのか工夫していくことで、「体験」で終わらない関係性が生み出されるかもしれない。

② 見えてきた課題

福祉農園を中心に活動した事で得られる成果は前項に挙げたように様々あったが、逆にそれらをより多面的に発展させるためにも、近隣農家をはじめとする地域の様々な人とつながっていくということの重要性を感じた。

今回、福祉農園外の人との交流は限定的になってしまったが、農園というフィールドが地域で活動する人や近隣の農家の方とどのようにつながりを持つのか、また、どのように関わり、課題を得ていくのかという点については、来年度に向けた検討課題になる。

また、今年のサバイバルキャンプは、農園代表が事情により農園を不在にする時間が長かったため、事故を起こさないように、作業を進めることに非常に注意する時間が続き、緊張状態が常に続くという場面が多かった。キャンプ開催期間の一週間は非常に暑く、健康面に非常に気をつかった。作業面でも当初の計画から遅れを出さないようにとプレッシャーをかけていく状態を作ってしまった。

そのため、集中して作業、仕事に取り込むという面が多く、疲労は日を重ねるごとに蓄積されていっ

た。ただの「労働」ではなく、その作業に意義を感じ取るための工夫や、緊張感を抜くための工夫も、もう少し必要であったように思う。

③ 極限状態から見てきたもの

非常にストイックに一週間が過ぎていく中で、詩のワークショップを行うことができたのは今回のサバイバルキャンプでの大きな発見であり、今後の課題となるヒントが得られた。

詩人の上田假奈代さんが参加されたことで、「詩のワークショップ」を行うことが出来た。そういった芸術面での活動が影響を与え、6日目の朝に改めて朝作業から作る三行詩のワークショップを行うに至った。これは非常にストイックに作業を行う状態を豊かに仕事を変える瞬間であった。作業を中心に行う日々の動きや感覚、これらを詩に表現するという作業はまさに、仕事を芸術として高める一場面であったと思う。また、作業の中での共同以上に、作業と芸術という部分での交流と共同がそこからは生まれていたように感じる。

こういった経験から思うことは、農村での娯楽はなんであったか、日々のつらい仕事ばかりではない、その空間で生きることを豊かにする活動は何であったかという点であった。

村の祭りや遊び、それらが芸術活動へと高められる場面は、かつては多くあったように思う。それは農村での仕事や遊びを労働から楽しみに高め、暮らしの一部として取り込むということ、その作業に、仕事から詩を生み出すということが非常に近いものがあったように感じる。

今後の大きな視点として、「仕事」を単なる「稼ぎのための労働」と捉えるのではなく、人との交流や美的価値を生み出してくものとして捉えなおし、自らの体から生み出された感覚を、またそれを生活の空間として生かしながら、共有する作業をいかに作るのかが非常に重要になってくるように思う。

この点で見沼・風の学校がただ単に農を体験する団体ではなく、共に作業を通じて、ひとつの文化や知、空間を作り出していき、それらはさまざまな関係から生み出されていくような状態をいかに作っていくかが今後の課題として捉え、働きかけていけるようにしていくことが今年のサバイバルキャンプから見てきたものであった。

5、まとめ

：「しんどさ」の中でつながる、「しんどさ」を越えてつながる

風の学校の次世代育成は、単に農園活動の「楽しさ」を共有する中ではなく、その活動の持つ「しんどさ」を社会的課題として認識し、その先に創造性や、共同性を見出す人材を育てることにある。

今年一年の活動の中で手に入れたのは、そういう認識であった。

福祉農園は、障害者への社会的排除や、生活環境の破壊に対峙する中で生まれた。「障害者」と言われる人たちが、当たり前ものとしてそこにいることを、僕は自然のこととして受け止めていた。

しかしそれは、農園の中だけのものであり、農園の外に出たときには当然のごとく彼らに対する差別が存在している。実際、福祉農園は「福祉団体だから」という理由で、見沼田んぼで活動する「市民団体」から除外されてきた。

うちにこもって福祉農園をユートピアにするのではなく、福祉農園の活動を農園の外や見沼の外に向けて拡張していく中で、社会のあり方を問い直すこと、あるいは福祉農園の中にいる人たちの「しんどさ」を共有し、笑い飛ばし、解決の道を探っていくこと、その中で次につながる「主体」が生まれる。

来年は、福祉農園の10年後を見据えた本格的な活動を展開していきたい。

